

東京都品川区



JTEの活用と独自カリキュラムで 実践的な英語力を育む

早くから小中一貫教育の構造改革特区に認定されていた東京都品川区では、小学1年生から英語を教科と位置付け、小中9年間の視点で一貫性のあるカリキュラムを編成している。ここ数年、JTE（日本人英語指導者）をモデル校に配置し、特に「話す」「聞く」の指導を充実させ、読み書きの指導にも重点を置く新しいカリキュラムの研究も進めている。

東京都品川区

◎東京都の南東部に位置する特別区の一つ。江戸時代、東海道の品川宿として発展した。子育て支援の手厚さには定評があり、教育改革「プラン21」を推進するなど教育施策にも力を注ぐ。

面積/約23 km² 人口/約37万人 小学校/37校 中学校/15校 児童生徒数/約1万9000人

教育委員会 所在地 〒140-8715 東京都品川区広町2-1-36

電話 03-5742-6832 (指導課)

URL <http://www.city.shinagawa.tokyo.jp/hp/menu000006100/hpg000006066.htm>

教育長インタビュー

真に子どものためになる教育を 「プラン21」で推進

品川区教育委員会 教育長 **中島 豊**

2000年度から長期視点で 教育改革を推進

品川区は、社会の変化に対応し、教員や公立学校の質の向上を目的として、2000年度から「プラン21」という教育改革に取り組んでいます(図1)。

まず、小学校には2000年度、中学校には2001年度に、「学校選択制」を導入しました。従来からの通学区域を維持しつつ、通学区域外の学校への入学も可能とする制度です。こ

れは、各校の教育改善への努力に支えられ、区全体の教育の質を底上げする取り組みとして定着しています。

2002年度には、学校としての説明責任・結果責任を重視するため、独自の学力調査を始めました。これは、「学力定着度調査」という名称で現在も継続しています。

更に、2006年度には、義務教育9年間の視点で系統的な教育活動を実現することを目指し、全ての区立小・中学校において「小中一貫教育」を開始しました。



なかじま・ゆたか 2003年品川区指導課長、2006年杉並区立若杉小学校長、2008年杉並区立天沼小学校長等を歴任。2013年から現職。「昨日の『新しい』は、今日の『古い』である。常に動き続けて社会の変化に対応していきたい」

*プロフィールは2015年3月時点のものです。

これらの改革を通して、学校の体質の転換、教員の意識改革を図り、学校経営のあり方そのものを見直してきた経緯があります。

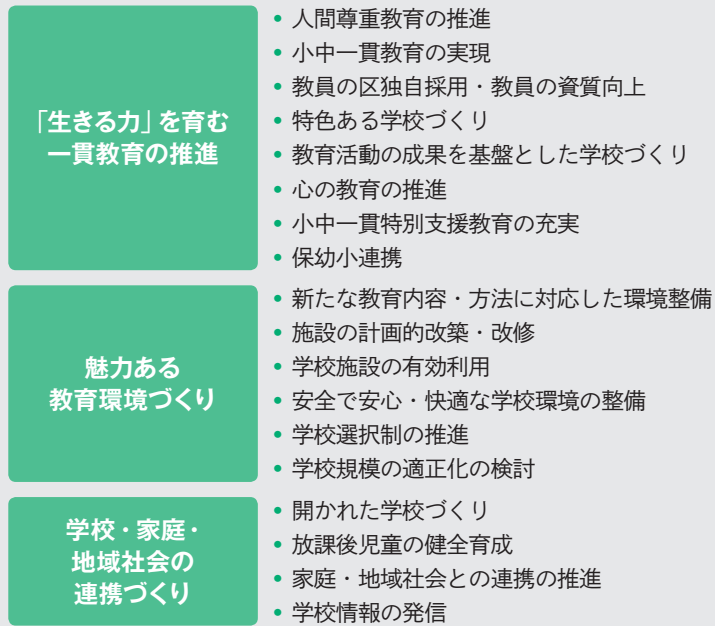
「プラン21」を踏まえた現状の重要課題は、①各種の制度改革への対応、②2020年の東京オリンピック・パラリンピックを見据えた対応、③新たな形の地域連携の推進です。

①各種の制度改革への対応では、教育委員会制度改革に係るものとして、区としての教育大綱の作成と、2015年4月にスタートした総合教育会議の実施が課題として挙げられます。更に、現在、法制化が検討されている小中一貫制度への対応もあります。本区では、約10年にわたり小中一貫教育に取り組んできました。この法制化は、本区の成果が認められた状況だと捉えています。今後、小中一貫教育が国の施策として進み中で、本区独自の取り組みの質をいかに高め、広げていくかが課題です。

②2020年の東京オリンピック・パラリンピックを見据えた対応としては、グローバル人材の育成が柱となります。また、これまで「プラン21」で重点化していなかった体力向上・健康増進に向けた取り組みにも力を注いでいく考えです。専門の委員会が、運動の量と質を高めるために学校教育として出来ることを検討し、2015年度から具体的な取り組みを進めています。

③地域連携に関して、本区は、学校に対する保護者や地域住民の思いが非常に強いエリアです。これまでも、学校の教育活動が多くボランティアによって支えられてきました。今後も持続可能な学校として維持・発展するためには、校長の異動などによって学校の教育方針や取り組みが変わるような状況をなるべく避け

図1 品川の教育改革「プラン21」の施策の体系(抜粋)



*品川区教育委員会提供資料を基に編集部で作成

る必要があります。そのため、小中一貫教育推進委員会の中に地域部会を設け、地域連携のコーディネーターを置くなどして、地域の資源を活用しながら、新たな形の地域連携を模索したいと考えています。

多面的な方法で グローバル人材を育成

②の柱であるグローバル人材の育成については、小中一貫教育の中で英語教育に注力してきました。特に重視しているのは、英語を用いたコミュニケーション能力を育むために、「話すこと」「聞くこと」に対する抵抗感を少なくすることです。小学校段階からシャワーを浴びるように大量の英語に触れさせ、英語を使うことを楽しめる子どもを育てています。

グローバル社会で活躍するためには、英語力だけではなく、豊かな表現力も欠かせません。ICTなども積極的に活用し、プレゼンテーション能力をはじめとした表現する力を育みたいと考えています。

日本人は、相手にはっきり意思を表示することが苦手だと言われてきます。本区では、2006年度から、子どもが自分の生き方を考え、将来を見つめて人生観を構築できる資質や能力を育むために、小・中学校共に「市民科」という科目を設けています。この科目を通して、自己の意思決定などについて学ぶことも、グローバル人材に必要な資質の育成につながると捉えています。

社会の大きな変化に伴い、学校が直面する課題や社会のニーズは多様化しています。「プラン21」を始めた頃、「教育改革」という言葉には、それまでの教育を否定して新しい何かをつくり出すようなイメージがありました。しかし今や改革の重要性が認識され、毎年、PDCAサイクルを機能させて教育活動を見直し、改善していくことが当たり前という時代になりました。常に「チェンジ」を意識して社会の動きに対応し、真に子どものためになる教育活動をつくり出していきたいと思っています。

教育委員会の取り組み

JTEとのTT、英語への抵抗感をなくす授業で子どもと教員の両者に良い変化が

区費でJTEを採用し 小学校の英語の授業をTTに

品川区は小中一貫教育の構造改革特区に認定され、いち早く教科としての英語教育に取り組んできた。2006年度には、区の小中一貫教育要領において、1年生（小学1年生）～9年生（中学3年生）が学ぶ教科として「英語科」を位置付け、9年間を「4-3-2」と捉え、一貫性のあるカリキュラムを編成した（図2）。

英語科で特に重視するのが、「聞くこと」「話すこと」を中心とした実用的なコミュニケーション能力の育成だ。1～4年生は「英語に親しむ」、5～7年生は「英語を身に付ける」、8・9年生は「英語を活用する」に重点を置くとともに、世界の社会や文化、英語以外の言語などへの関心や理解を深めることを目指す。年間の授業時数は、1・2年生では20時間、3～6年生では35時間、7～9年生では140時間と設定した。

英語科の授業実施に当たり、教育委員会では小学校教員の指導に対する不安の軽減に努めている。ワークシートやカード、歌、チャンツなどの教材を作成し、発音をカバーする

ためCDも用意した。1・2年生の授業にはALTが、3～6年生の授業にはJTE（日本人英語指導者）がそれぞれ入り、担任とALT・JTEとのTT（チーム・ティーチング）で授業を進める。渋谷正宏指導課長は、このねらいを次のように説明する。

「他区から異動してくる教員もいるため、区として一定レベルの指導を維持するために、小学校ではALTやJTEが中心となって授業を進める体制を整え、教員はTTを通じて徐々に指導力を高められるようにしました」

教員の指導力向上において、特に効果が高いのはJTEとのTTだという。そこで、2014年度、区費で10人のJTEを採用した。募集告知は区内のみであったが、100人を超える応募があった。「採用した10人のうち9人は中学校英語教諭の免許を持つなど、指導技術を有する人材を確保できました」と、渋谷指導課長は話す。

授業案は、区のカリキュラムを基にJTEが作成し、授業前に担任と共有。慣れない英語の授業準備で担任に負担が掛かり過ぎないように配慮している。授業は主にJTEが進め、担任は個々の子どもの支援を行うというのが基本的な形だ。授業を重ねるごとに担任も英語に慣れ、クラスルーム・イングリッシュ*1を覚え、指導のポイントも理解していくという。

「担任が慣れるに従い、徐々に授業内での役割を増やしていきます。年度の後半には、JTEに代わって授業を主導する教員もいました」

中学校では意欲の高い 生徒への取り組みも実施

これまでの小学校の英語の授業は、ゲームや歌などのアクティビティが中心だったが、高学年になると飽きが見られるという課題があった。そこで、青山学院大のALLEN玉井光江教授の協力を得て、新しいカリキュラムを開発した。その特色は、「Joint Storytelling」という学習活動に力を入れていることだ。英語の歌やチャンツを織り交ぜ、動作を付けて声に出してストーリーを語ることで、子どもの聞く力や話す力をバランス良く伸ばそうというねらいがある。

「子どもが知っている物語を題材とします。そのため、全ての英語が分からなくても、話の内容をなんとなく理解できます。そのような『あいまいさ』に耐えながら聞く訓練を続けることにより、英語への抵抗感が薄れていくのです」（渋谷指導課長）

2つめの特色は、「Literacy」だ。低学年から活動を通してアルファベットに親しみ、英語のつづりと発音の関係の規則性を学ぶフォニックスなども取り入れ、初見の単語も読めるような指導を行っている。

新カリキュラムは、品川区立小山台小学校が最初に実施し、2014年度には同区内の城南小学校と三木小学校に導入。城南小学校と三木小学校の教員は、担当学年ごとに小山台小学校の教員と連携し、授業の進め方や指導のポイントなどの助言を受



品川区教育委員会
事務局指導課長
渋谷正宏
しぶや・まさひろ

「時代が変化する中、子どもにとって何が良いかを考え続け、例年通りで良いしない」

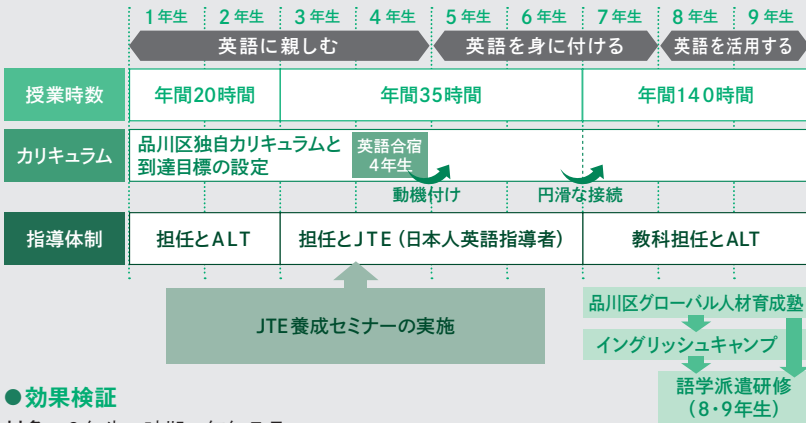
*プロフィールは2015年3月時点のものです。 *1 あいさつや指示、質問、称賛、励ましなど、英語の授業などで使われる英語表現のこと。

図2 品川区の英語教育の概要

● これからの時代に求められるグローバル人材

- 使える英語力
到達目標：中学校卒業時…英検3級程度 高校卒業時…英検準2級～2級程度
- 異文化理解適応能力
- グローバルなリーダーシップ

● 英語教育の体制



● 効果検証

対象：9年生 時期：毎年7月
 評価方法：「読む」「聞く」「書く」はGTEC for STUDENTSで評価。
 「話す」は各校の英語科教員による1人7分のパフォーマンステストを実施。
 *品川区教育委員会提供資料を基に編集部で作成

けた。そして、2015年度はこの3校を拠点校として、14校が新カリキュラムを導入し、2016年度の区内全小学校での実施を目指している。

中学校の英語教育の改善も進めている。2014年に開設した「品川区グローバル人材育成塾」は、会話を中心とした英語でのコミュニケーションを学ぶ課外講座だ。ALTが講師を務め、1クラス15人程度で、平日は毎日開講する。4つの中学校で実施しており、希望者は週1日、最寄りの学校で受講できる。

初年度は、区内中学生の約1割に当たる約500人が受講した。意欲的に学ぶ姿が見られたが、個々の英語力の差が大きく、講座内容のレベル設定が難しかったため、2015年度はALTが受講生全員と面接をして、2つのレベルにクラスを分けている。

更に、2015年度の夏休みには、中学生の希望者を対象に、英語学習や国際交流を行う「イングリッシュ

キャンプ」を実施する。

「授業を通して生徒全体の英語力向上を図ることも重要ですが、『もっと英語力を身に付けたい』と望む生徒の意欲に応えることも大切にしています。『グローバル人材育成塾』や『イングリッシュキャンプ』は、それを考慮した取り組みであり、生徒それぞれの長所や個性を伸ばし、リーダーシップを発揮できる子どもを育てたいと考えています」(渋谷指導課長)

4技能の状態を把握し 指導改善にも活かす

取り組みの効果検証も進めている。2014年度から、9年生全員がGTEC for STUDENTSを受検して「読む」「聞く」「書く」の3技能を測定し、「話す」については、各校が生徒一人ひとりに7分間のパフォーマンステストを実施することにした。パフォーマンステストは、各校でのばらつきが出ないように、研修を実施して内容

や採点基準の目線合わせをしている。

検定の結果は生徒に返却して、個々の実力把握や目標設定などに生かしている。更に、教員の授業改善にも活用している。

「中学校の授業でコミュニケーションの要素を充実させることが、今後の課題です。外部テストなどの結果を通して教員自身が指導を振り返り、授業を変えるきっかけにしてほしいと考えています」(渋谷指導課長)

低学年からの英語教育に 保護者も高い期待を寄せる

小学校からの英語科の導入に関する子どもへのアンケートでは、「英語の学習が大切」と答えた児童・生徒は、小学校では91.7%、中学校では85.9%に上る。また、保護者の期待や関心も高く、「低学年からの英語教育は良い取り組みだと思う」の肯定率は、小学校では92.3%、中学校では88.4%となっている。

「小学校低学年からの英語教育の実施により、英語に積極的な姿勢が出来て、中学校での英語学習もスムーズになっています」(渋谷指導課長)

英語に親しむことで、子どもに自信や「もっと英語を使いたい」という気持ちが生まれ、コミュニケーションの素地が養われているのだ。

JTEの活用により、教員の英語指導に対する戸惑いがほとんど見られなくなるなど、教員の意識改革も進んでいる。「子どもと共に学ぶ」という英語指導の姿勢が他教科にも波及し、特に若手教員の指導力が向上しているのも成果の1つだという。

「子どもと教員、両者の変化に確かな手応えを感じています。今後も特色のある英語教育によって、地域の方々が公立の小・中学校を見直すきっかけになるように改革を進めていきます」(渋谷指導課長)

小学校での実践

Literacyと Joint Storytellingで 「積み上がる学習」を実感

品川区立城南小学校

◎ 1874(明治7)年開校。旧東海道沿いに位置し、敷地内には品川区立城南幼稚園を併設する。同じ品川区立の城南第二小学校、浅間台小学校、東海中学校と共に小中一貫教育に取り組む。

校長 中嶋英雄先生

児童数 318人

学級数 12学級

住所 〒140-0004 東京都品川区南品川2-8-21

電話 03-3471-7919

URL <http://school.cts.ne.jp/jonan/>



授業の流れを全学年で統一 学びの見通しを持たせる

品川区立城南小学校は、2014年度に開校140周年を迎えた歴史のある学校だ。子どもたちは、地域に見守られながら素直に伸び伸びと育ち、地域行事や縦割り活動などを通じて上級生と下級生の仲も良い。一方、学習面では自主性にやや課題が見られるほか、外遊びが不十分で、体力が不足している子どもが見られるという。

同校は品川区の施策の下、英語教育に力を注ぎ、グローバルに活躍できる資質・能力の育成を目指している。中嶋英雄校長は次のように話す。

「流暢ではなくても通じる英語を身に付け、世界中の人々と堂々とコミュニケーションできるようになってほしい。『もっと外国について知りたい』と思い、日本や地域の魅力を外部に発信してもらいたいと思います」

2006年度からは区の方針により1年生から英語科を導入し、2014年度には研究校として新カリキュラムによる英語教育を開始した。

このカリキュラムでは、子どもが見通しを持って学習できるように、全学年で授業の流れを共通にしている(図3)。歌やゲームなどのアクティビティが大半を占めていた以前のカリキュラムに比べ、学びの要素を強くし、2つの柱である「Literacy」と「Joint Storytelling」について、6年間を通して学習を積み上げていく設計となっている。

「Literacy」では、6年生の段階でアルファベットの大文字・小文字の読み書きが出来るレベルを目指し、学年が上がるにつれて学習時間を増やしている。低学年では歌や動作を通してアルファベットに親しみ、中学年はカードやカルタなどで文字を学び、高学年になると読み書きの学習に入るといった流れだ。

知らない単語は推測する その積み重ねが中学校で生きる

「Joint Storytelling」は、物語を聞き、意味のある文脈を通して英語を学ぶ活動だ。1つの物語を15回の授業に分け、毎授業行う。

4年生の授業を例に、活動の流れを説明する。今回の物語は、1年生の国語で学習し、内容を理解している「おおきなかぶ」だ。他学年でも昔話や童話など、子どもがおおよその内容を理解している物語を扱う。

まず、JTEが4年生で身に付けさせたい表現やフレーズを散りばめた紙芝居を作り、子どもに読み聞かせる。子どもが知らない単語や表現があり、聞き取れない場面もあるが、日本語では説明せず、分かることを基に類推しながら聞くように指導する。「大人でも、会話の中で分からない言葉が出てきたら、推測して理解します。意味が分からなくても、知っている単語などを手掛かりにして大まかに理解するという訓練が、中学生以降の学習に生きてくると考えます」と、研究主任の山田仁先生は話す。

続いて、JTEが重要な単語にサイン(動作)を付けて、再度、物語を読み聞かせる。子どもたちはまねをして、サインと共に物語を話す練習を繰り返す。

「物語を聞いて、声に出して再現するという学習を通し、聞く力と話す力の両方を伸ばしていきます。サインを付けることで物語を理解しやすくなるとともに、表現もしやすくなるという効果があります」(山田先生)

ここでは、「CLIL*1」(内容重視型英語授業)という英語教育法も意識している。これは、英語と他教科の学習を統合する教育手法のことで、「おおきなかぶ」では理科と結び付け、いろいろな野菜の食べられる部位に

*プロフィールは2015年3月時点のものです。

*1 Content and Language Integrated Learning略。

図3 英語科の授業の流れ 5年生の例

	学習過程	活動内容	HRT	JTE
ROUTINE 28分	Greetings (1分)	①先生とあいさつする。日直があいさつをする。	Who are today's leaders? Hello! Everyone!	Hello! Everyone!
	Song (5分)	② Michael, row the boat ashore を歌う。	児童に問いかけの歌を歌う。	一緒に歌う
	Literacy (15分)	③アルファベット小文字の文字と音の学習をする。 ①音素体操をする。 ②アルファベットカード並べをする。 ③ライムを使って、単語づくりをする。 ④ワークシートにHRTが言う単語を書く。	・一緒に音素体操をする。 ・ワークシートを配る。 ・ライムを示す。 ・単語を言う。	・一緒に音素体操をする。 ・時間を示す。 ・発音を確認する。 ・正解を黒板に書く。
	Vocabulary (7分)	④ Throw me a ball を行う。	・ヒントを出す。分かった児童にボールをパスする。	・ヒントに出てきた単語を黒板に書く。
ACTIVITY 17分	Activity1 (8分)	⑤ "Goldilocks and the Three Bears" の Joint Storytelling を行う。	・ナレーターを行い、話の進行をリードする。	・児童と一緒に行う
	Activity2 (7分)	⑥ "We're Going on a Bear Hunt" の Storytelling を聞く。	・児童ができるところは、JTEと一緒に行うように促す。	・Storytelling を行う。身振り手振りをつけ、一緒にできるところは行うように促す。
	Farewell	⑦先生とあいさつする。ワークシートに記入する。	・一緒にあいさつをする。 ・ワークシートに書く事柄を説明する。	Good bye, Everyone!

*城南小学校提供資料を基に編集部で作成

ついて考えた。

そして最後に、1年生の前でサインと共に物語を語る発表を行った。

「Literacy」と「Joint Storytelling」について、6年生担任の桑畑大樹先生は次のように説明する。

「以前の授業は、1時間ごとに完結し、本当に学習内容が身に付いているのかが実感しにくいものでした。このカリキュラムでは、学習が積み上がり、最終的に子どもにどのような力が付いているのかが明確に分かるようになりました」

6年生は、同校の140周年記念式典で「Joint Storytelling」の成果を披露。桑畑先生は、堂々と発表する姿を見て、授業の成果や子どもの成長を実感したという。

授業はALT・JTEとのTTで進める。「子どもにとって、ALTとの学習は『外国人と話している』というインパクトが強く、特に低学年の興味を引くのに有効だと感じます。一方、JTEには日本語が通じるため、子どもにも理解しやすいように説明できる

という良さがあります」と、山田先生は話す。

授業後、子どもがワークシートに振り返りを記入して提出すると、JTEは個別にメッセージを返す。

「JTEとのやり取りを通して、子どもは英語への関心を高めていきます。そのような深いかわりが出来ることも、JTEの魅力です」(桑畑先生)

JTEなら担任と日本語で打ち合わせが出来るため、役割分担を明確にしたり、子どもの実態を密に共有したりしやすいといった利点もある。

「授業では、JTEのフォローを受けながら、担任自身の英語力が上達していく姿を見せることが、ある意味では教材となり、子どもの学ぶ姿勢につながっています」(桑畑先生)

少し難しい課題が子どもの意欲を引き出す

1年間の新カリキュラムの実践を通し、英語に対する子どもの意識や姿勢は変化している。特に、教員がよく耳にするのが、「分かりやすく

なった」という子どもの声だ。

「授業の流れが明確になり、見通しを持って学べるようになったこと、自分が何を学べばよいか分かりやすくなったこと、またLiteracyが土台となり英語への理解が深まったことなど、いくつもの分かりやすさが重なっていると感じます」(山田先生)

子どもにとって難しい授業であるにもかかわらず、以前にも増して意欲的に取り組む姿が見られる。

桑畑先生が受け持つ学級は、やや引込み思案な子どもが多く、授業での挙手が少なめだった。ところが、英語の授業になると、積極的にになり、主体的な発言が目立つという。

「少し難しい課題に取り組むようになり、ちょっと背伸びをしてチャレンジするという感覚を持っているのが良いようです」(桑畑先生)

次年度は、小中一貫教育と一緒に取り組むほかの2つの小学校に新カリキュラムの指導を広げるとともに、中学校とは英語教育のよりスムーズな接続を模索していく考えだ。



品川区立城南小学校
校長

中嶋英雄

なかじま・ひろお

「子どもの中にあるダイヤモンドの原石を見つけ、保護者と協力して輝かせることが教育者の役割」



品川区立城南小学校

山田 仁

やまだ・ひとし

研究主任(英語担当)、4学年担任。「失敗しても試練だと前向きに捉え、次を考えていく大切さを子どもたちに伝えたい」



品川区立城南小学校

桑畑大樹

くわはた・ひろき

生活指導主任、6学年担任。「『こうあるべき』という理想像ではなく、子どもの実態から教育活動をスタートする」